

温暖化は、なにも遠い北極や南の島々だけの話ではありません。私たちが日々の生活を送るこの川根本町にも、温暖化による気候変動の影響は及びます。川根本町の大切な自然資源である南アルプスや、太古の昔から町の中央を流れる大井川、そして、川根本町の基幹産業であり、全国にその名を知られる川根茶。これら、川根本町の宝物とよべるような資源や産業にまで、温暖化の足音がせまってきた。いるということ、皆さん、ご存じですか。

南アルプスに群生する高山植物が、行き場を失ってしまいかもしれない。大井川に生息する川魚たちがいなくなってしまうかもしれない。先人から受け継がれてきた伝統の茶栽培の技術や知識が、根底から崩れさつてしまう日が、いつか訪れるかもしれない…。

あくまで可能性の話ではありませんが、絶対あり得ないと断言できる話でもないのです。ここでは、温暖化が川根本町に及ぼす影響の数々についてみていきたいと思えます。



南アルプスの高山植物の分布域に変化が

高山植物は気候の変化に弱い

川根本町には南アルプスがあります。光岳南西部は、本州で唯一「原生自然環境保全地域」に指定される重要な自然資源です。

ここでみられる高山植物は、著しい低温や強風、乾燥など、高山帯の厳しい環境に適応して生きています。しかし、温暖化により気温が2℃上昇すると、このような条件の場所がだんだん狭くなっていき、標高の低い場所に生えている強い植物が植生範囲を広げられるため、高山植物を追いやってしまう可能性があると考えられています。

南アルプスでは、氷河期に荒川三山のあたりまで南下してきた氷河と一緒に、北極からやってきた植物の子孫が見られます。北極の兄弟たちと同じ形で残っている、チョウノスケソウやタカネマンテマなどの植物は、何十万年もの歴史を背負った南アルプス

●温暖化が「他人ごと」ではないワケ

進む温暖化が 私たちの町に 与える打撃 (の可能性)

シナリオ2を仮定した場合の川根本町



イワナ・アマゴなど渓流魚はさらに上流域に追いやられる可能性が

の財産です。また南アルプスは、さまざまな高山植物の分布域の南限でもあります。しかし最近では、光岳のハイマツ分布の南限が北に移動してしまっているのではないかと考えられています。

アユは静岡県全域で見られ、特に狩野川、安倍川、天竜川、大井川などの大きな川がよい漁場です。秋になるとアユはこれらの川で産卵し、生まれた仔魚はすぐに水の冷たい海に下ります。

大井川の魚がいなくなる?

海での生態はまだ分からないことが多いのですが、昔から暖冬にはアユが少なくなるといわれており、駿河湾や相模灘の海水温が高かった年には、アユがあまりとれませんでした。また冬でもあまり水が冷たくならない沖縄では、アユがうまく繁殖できないと考えられて



夏場の水不足が茶の生育に影響するかもしれない

います。温暖化により海や川の水温が上がると、アユの繁殖が影響を受ける可能性があります。天竜川や大井川水系には、冷水性の魚類であるイワナとアマゴが共存している川があります。イワナはより水の冷たい源流域に、アマゴはその下流域に棲みわけています。平均水温が上昇すると、イワナやアマゴは標高の一層高い場所へと追いやられ、生息域が狭まって、一部の川では絶滅してしまうかもしれません。

お茶の栽培にも変化が

お茶は亜熱帯性の作物のため、気温が少し高くなる程度であれば影響は少ないと思われます。暑いときに人が汗をかいて体温を調節するように、茶の木も蒸散によって温度調節をしています。しかし、少雨・高温により水が不足すると、温度調節ができずに

茶の葉の火傷や落葉が生じ、茶の生育が抑制されるなどの影響があります。静岡県では1994年から4年連続で、真夏に少雨による影響を受けています。

また、静岡県のお茶は冬の寒い中では休眠状態で過ごし、冬越し後に一斉に芽を出すのできれいに揃った一番茶を機械で摘むことができます。しかし、冬が暖かくなると芽が不揃いになりやすく、機械で摘みにくくなるなど新しい問題が生じます。さらに、温暖化により降水パターンが変わったり水不足になったりすると、今まで以上に散水が必要になり、品種や栽培方法を変更する必要も生じてくるのが考えられます。

ここで述べた話は、あくまで可能性の話でしかありません。しかし、絶対あり得ないと断言できる人は誰もいないのです。私たちの世代では、そこまで大きな影響は訪れないかもしれませんが、しかし、私たちの子どもたちの世代、そして、その次の子どもたちの世代では、どう地球が変わっているのか分からないのです。それが地球温暖化という問題なのです。